

# ジョージ・F・ケナン『アメリカ外交50年』と 封じ込め政策の展開

佐々木 卓也

はじめに

- 一 朝鮮戦争と冷戦の激化
- 二 『アメリカ外交50年』の議論
- 三 ケナンの政治・外交評論  
おわりに

はじめに

第二次世界大戦終結後、戦後国際政治をめぐりアメリカとソ連との間で対立が始まった。冷戦の勃発である。ソ連の脅威に対抗するために、「封じ込め」政策を打ち出した人物が、国務省のソ連専門家のジョージ・ケナン (George F. Kennan) であった。ケナンは一九五一年四月上旬、国際政治学者であるモーゲンソー (Hans Morgenthau) シカゴ大学

ジョージ・F・ケナン『アメリカ外交50年』と封じ込め政策の展開 (佐々木)

二七九

教授の招待を受け、ウォルグリーン財団の後援の下、同大で六回にわたる連続講義をおこなった。ケナンは前年秋以降国務省より無給の賜暇を得て、プリンストン高等研究所に籍を置いていた。このシカゴ大講義を中核とし、二つの論文「ソヴェト行動の源泉」（一九四七年七月）と「アメリカとロシアの将来」（一九五一年四月）を加え、五一年秋に刊行されたのが、『アメリカ外交50年』である。<sup>1)</sup>

『アメリカ外交50年』は、ケナンと縁の深い外交専門誌フォーリン・アフェアーズが「最も広く読まれた二〇世紀前半アメリカ外交の議論」と評し、優れた冷戦史研究者であるレフラー (Melvyn P. Leffer) が「アメリカ外交についてなされた最も著名な連続講義」と述べるように、今ではアメリカ外交論の古典として確たる地位を得ている。二〇一二年には六〇周年記念版が刊行され、ミアシャイマー (John J. Mearsheimer) シカゴ大学教授が序言を寄せている。日本でも原著刊行の翌年にさっそく、近藤晋一と飯田藤次による翻訳版が刊行され、その後有賀貞を新たな訳者として版を重ね、現在に至っている。<sup>2)</sup>

ケナンは二〇〇五年に一〇一歳で長逝するまで、回顧録(全二巻)をはじめ、米ソ関係史、ヨーロッパ外交史、ソ連政治・外交史の分野を中心に約二〇冊の著作を発表したが、『アメリカ外交50年』は最初の作であり、またおそらく最も有名であろう。この本はケナンの基本的な思想、政治・外交論を披露しており、外交史家・評論家として長いキャリアを誇ったケナンの出発点に位置している。

本稿の目的は、『アメリカ外交50年』の中心をなすシカゴ大学講義にとくに注目し、講義がなされた時期のアメリカの政治・社会・外交の文脈にケナンの議論を置いて検討することである。『アメリカ外交50年』を評論、批評した研究は枚挙にいとまがないが、ケナン講義がなされた時期のアメリカの状況に照らして、彼の主張を考察した試みは

ない<sup>(3)</sup>のである。

## 一 朝鮮戦争と冷戦の激化

国務省に新設された政策企画室の室長に就いたばかりのケナンは一九四七年夏、フォーリン・アフェアーズに匿名Xで発表した「ソヴェト行動の源泉」において、ソ連の膨脹に対する「長期の、辛抱強い、しかも確固として注意深い封じ込め」を提案した。彼は西ヨーロッパと日本の経済再建を重視し、現行の二三〇億ドル程度の軍事予算で十分であると考えていた。ケナンの構想は戦争に訴えることなく、対ソ冷戦を長期戦に持ち込み、アメリカの政治・外交・経済・諜報手段を十全に活用し、本質的な欠陥を有するソヴェト体制の変容、変質を辛抱強く待つ戦略であった。彼は、ひとたびアメリカを取り巻く国際環境が好転すれば、ソ連との間でドイツ問題を始めとする外交懸案を話し合ふべきだと主張したが、それは非軍事的手段の行使によってソ連体制に段階的变化をもたらすことができると確信していたからである。

しかし一九四九年夏のソ連の原爆実験成功、秋の中華人民共和国の樹立を契機に、トルーマン (Harry S. Truman) 政権内では安全保障政策の見直し論が高まり、ケナンの影響力は急速に衰退した。トルーマン大統領はアチソン (Dean G. Acheson) 国務長官の勧告を容れ、一九五〇年一月末に国家安全保障政策の再検討と水爆開発を命じた。前者の作業を担ったのが、ケナンの後を襲ったニッツェ (Paul H. Nitze) であった。ニッツェを長とする特別委員会は一九五〇年春までに国家安全保障会議文書第六八号 (NSC 68) を策定し、ソ連の軍事的脅威の増大が一九五四年

半ばにも頂点に達すると警告し、国防予算の五〇〇億ドルへの引き上げ、封じ込めの軍事化・グローバル化を主張したのである。

政府内でNSC六八をめぐる議論、とりわけ軍事費増をめぐる議論がおこなわれていた時、朝鮮半島で突如戦争が起き、国際緊張が一気に高まった。トルーマン政権は九月にNSC六八を承認し、アメリカは大規模な軍拡に乗り出した。封じ込め政策は提唱者の意図を離れ、著しく軍事化しグローバル化した。今や「力の立場」(アチソン國務長官)の構築それ自体が封じ込めの目的と化したようであった。<sup>(4)</sup>

朝鮮では九月初旬、マッカーサー(Douglas MacArthur) 国連軍最高司令官が本国軍部の慎重論を押し切って仁川上陸作戦に成功し、北朝鮮軍を一気に敗走に追いやった。劇的な軍事的成功の前に、トルーマン政権が国連軍を戦前の境界である北緯三八度線で停止させることは政治的に不可能であった。国内では一月上旬の中間選挙を直前にして、民主党政権は共産主義勢力に弱腰であるというマッカーシー(Joseph R. McCarthy) 共和党上院議員らの激しい攻撃に晒されていた。韓国の李承晩大統領もまた、武力統一を待望していた。

マッカーシーは一九五〇年二月以来、米國務省に共産党のスパイがいると主張し、民主党政権の失態がソ連の原爆製造、中国の「喪失」を招いたと決めつけ、その外交政策を徹底的に批判していた。彼の扇動的な言動は朝鮮戦争の勃発でさらに弾みを得、政治的影響力を増していた。マッカーシーは中間選挙で改選を迎える同僚議員の応援で引張りだこであった。すでに國務省の有能な中国問題の専門家であるヴィンセント(John Carter Vincent)、デイヴィス(John Paton Davies, Jr.)、サーヴィス(John Stewart Service)、クラブ(Oliver Edmund Clubb)らは政治的迫害に遭い、國務省から追放されつつあった。彼らの多くは中国国民党の腐敗、無能を告発し、共産党政権の誕生を予期し

たに過ぎなかったが、蒋介石政権を支持するチャイナ・ロビー、マッカーシーの逆鱗に触れた。ケナンが政策企画室のスタッフとして重用したデイヴィスは、マッカーラン (Pat McCarran) 民主党上院議員が委員長を務める司法委員会国内治安小委員会に召喚され、執拗に証言を迫られた。ケナンも自ら証言席にたち、デイヴィスを弁護したが、無駄であった。<sup>(5)</sup>

一月の中間選挙の結果は与党民主党の大敗であり、民主党と共和党の議席差は上院では一二から二に、下院では九二から三五に大きく縮まった。民主党ではマッカーシーの活動を批判する報告書を発表したタイディングス (Millard Tydings) 上院議員 (軍事委員長、メリーランド州)、上院内総務のルーカス (Scott Lucas) 上院議員 (イリノイ州) ら有力議員が落選した。マッカーシーはこの二州での遊説にことのほか熱心であり、共和党躍進の立役者と見なされた。カリフォルニア州では対立候補を容共的と決めつけた新進のニクソン (Richard M. Nixon) 下院議員 (共和党) が上院への鞍替えに成功した。さらに共和党の領袖でミスター・リパブリカンと呼ばれたタフト (Robert A. Taft) 上院議員 (オハイオ州) が圧倒的な勝利で三選を果たした。彼は五二年の大統領選挙で共和党の指名を得ることが確実視されており、党内の右派・孤立主義勢力の指導者であった。<sup>(6)</sup>

中間選挙の直後、朝鮮半島の戦局が悪化した。マッカーサーは一月末、中朝国境に迫った国連軍に最終攻勢を指示し、米兵のクリスマスまでの帰国を約束したが、中国人民義勇軍が大挙介入した。国連軍は総崩れとなり、またたく間に三八度線以南への退却を余儀なくされ、五一年一月初旬にソウルが再陥落した。トルーマン大統領は中国軍の全面介入直後の記者会見で、原爆使用の可能性に言及し、しかもその行使が現地のマッカーサー將軍の裁量下にあるかのように言明した。戦争の拡大を懸念するアトリー (Clement Attlee) 英首相はすぐにワシントンに飛び、トルーマ

ン大統領らと会談した。アメリカ政府は中国軍の行動の背後にソ連の指示があると確信し、ソ連による世界戦争の開始を真剣に憂慮したのである。

マッカーサーは中国軍の介入により、「全く新しい戦争」に直面したと宣言し、本国政府に対し、中国沿岸の封鎖、中国に対する海と空からの爆撃、中華民国軍の朝鮮での利用と中国に対する「解き放ち」を求め、さらに核兵器の使用の許可を要請した。彼はまた異例にもメディアに対して、本国政府が科す「途方もない制約は歴史にその例をみない」と言い放ち、トルーマン政権の戦争方針に公然と異議を唱えたのである。

議会では、タフト上院議員が西ヨーロッパに対する米軍の増派に反対しながら、マッカーサー將軍の方針を支持し、米軍の満州爆撃、中国封鎖、国民党軍の大陸反攻を唱え、戦火の拡大を主張した。ケネディ (Joseph P. Kennedy) 元駐英大使、フーヴァー (Herbert C. Hoover) 元大統領も孤立主義の立場から、西半球の防衛の重視を説き、トルーマン政権の方針を批判した。これに対して政府の方針を支持する人々との間で、ちょうど一〇年前と同様に、「大論争」が展開された。<sup>(7)</sup>

ケナンは与り知らぬことであったが、トルーマン政権内でも封じ込めを超えた戦略が提起されていた。サイミントン (W. Stuart Symington) 国家安全保障資源局長官が NSC 一〇〇 (一九五一年一月二日) で、空と海からの中国封鎖と満州への攻撃を行い、東アジアの「全ての反共分子」に支持を与えて反中国闘争に従事させ、ソ連に対しては「平和維持のための条件」を伝え、それが拒否されれば、原爆の投下もやむを得ないと主張したのである。マッカーサーに倣った東アジア軍事戦略、そして対ソ予防戦争の提案であった。NSC 一〇〇はすぐに却下されたものの、政府内で高まる危機意識を物語る内容であった。また海軍のトップであるシャーマン (Forrest P. Sherman) 海軍作戦部長も

マッカーサーに同調し、「朝鮮におけるわれわれの立場が安定化するや、あるいはわれわれが朝鮮から撤退する時に」という条件で、中国の海上封鎖、中華民国軍の活用を求め、中国が朝鮮半島以外の米軍を攻撃する時には中国本土に對する空・海からの攻撃を提議した。これに對してアチソン國務長官は中国への攻撃が中ソ同盟の發動を招き、米ソ軍事衝突の事態を恐れた。彼によれば、アメリカが優先すべき地域はヨーロッパであるのに、「誤つた国」、「二流のチーム」と戦っているのである。トルーマン大統領は一九五一年一月半ばのNSC會議で最終決定を延期し、改めてこの問題を検討すると言明した。

シャーマン覚書の後、朝鮮の戦局は安定化した。米軍部は中国本土に戦争を拡大することなく、その立場を維持することが可能であると判断した。国連軍は三月上旬にソウルを再び奪還して北朝鮮軍を三八度線まで押し戻し、戦線はほぼ膠着状態に陥つた。ワシントンでは二月末までにアチソンの主張が支持を得、戦争を限定化し、現状での休戦を求める意見が大勢を占めるに至つた。<sup>(8)</sup>

マッカーサー將軍は三月下旬に、本国政府に事前に諮ることなく独断で、中国本土に對する攻撃を強く示唆する声明を発表し、四月上旬には民主党のアジア政策を攻撃する共和党下院院内総務のマーティン (Joseph Martin) 議員に宛てた書簡で、政府の限定戦争方針を改めて批判した。マーティンはすぐにこの書簡を公表した。マッカーサーはさらにほぼ同じ頃、英国の新聞とのインタビュで、彼の軍事作戦が本国政府の制約を受けていると不平を述べたのである。トルーマン大統領はついに、四月二一日マッカーサーを罷免した。トルーマンとマッカーサーの対立を検討した古典的研究によれば、「アメリカにおいて、大統領のマッカーサー將軍解任と將軍の……劇的な帰国ほど、激しくそして自然発生的な政治的激情を引き起こしたものはない」と分析するほど、激烈な反応が生まれた。国内では

トルーマン大統領に対する非難が沸騰し、マッカーシー上院議員は大統領の弾劾を求め、盟友のジェンナー (William Jenner) 共和党上院議員もこれに同調した。ニクソン上院議員もマッカーシーの罷免は国際共産主義運動の勝利であると言明し、政府の対応を非難した。

マッカーサーは一四日に東京を発ち、ホノルル市を経て、一四年ぶりに米本土に帰国した。将軍夫妻は一七日にサンフランシスコ市に上陸し、五〇万人の市民の出迎えを受けた。マッカーサーは翌一八日に上下両院合同会議で演説をおこない、アジアの戦略的重要性を訴え、朝鮮戦争の限定化を「敗北主義」、「宥和」に等しいと決めつけた。そして彼はワシントンに対して、中国の全面介入は「新たな決断」を必要としており、鴨緑江の北部の「聖域」に対する攻撃、中国に対する「経済的封鎖の強化」、中国沿岸の海上封鎖、「中国沿岸地域と満州の空中偵察の制限の解除」、中華民国軍の中国大陸攻撃に対する制限の解除を求めたが、却下されたと弁明した。そしてマッカーサーは「戦争において勝利に代わるものはない」と言い切り、中国を「宥和」する勢力を糾弾したのである。

演説を聴いたショート (Dewey Short) 共和党下院議員 (ミズーリ州) は「私は偉大な神の化身を目撃し、神の声を聴いた」と感激し、フーヴァー元大統領はマッカーサーを「偉大な陸軍将軍として東洋からやってきた聖パウロの再臨だ」と絶賛した。ある上院議員は「私はわが国の政治機構にとってこれ以上の危険を感じたことはなかった。もし演説がもっと長く続いていたら、ホワイトハウスへの行進があったかもしれない……」と言明するほど、強烈な印象を出席者に残した。演説直後、マッカーサー夫妻のワシントン市内の自動車パレードは二五万人の市民の、翌日のニューヨーク市では実に七五〇万人の市民の歓迎を受けた。ギャラップ世論調査によると、大統領の措置に反対する人々が五六%にのぼる一方で、支持は二九%に過ぎず、反対が賛成のほぼ二倍に達していた。大統領の支持率はマッ



カーサーの解任前にすでに二〇%台に低落しており、トルーマンは極めて不人気な大統領であった。

上院は四月二十五日、「極東の軍事状況と……」[マッカーサーの]「解任に関する事実の究明」をおこなうため、上院外交委員会と軍事委員会の共催での公聴会開催を全会一致で決議した。民主党の長老であるラッセル (Richard B. Russell) 上院議員 (上院軍事委員長、ジョージア州) を委員長とする公聴会は五月初旬にマッカーサー将軍を最初の証言者として、約二ヶ月間開催されることになった。<sup>(9)</sup>

マッカーサー罷免の前後に国内で重要な出来事があった。四月五日ニューヨーク連邦地裁は、前年七月にソ連に原爆製造の情報流したとして逮捕されたローゼンバーグ (Julius and Ethel Rosenberg) 夫妻に対し死刑判決を下した。四月一八日には戦後の超党派外交の担い手であったヴァンデンバーグ (Arthur Vandenberg) 共和党上院議員 (前外交委員長) が死去した。ヴァンデンバーグは民主党政権の外交を支える有力者であり、トルーマン大統領はすぐに声明を出して彼の死を悼んだ。ヴァンデンバーグ亡き後のワシントンで、民主党と共和党の党派対立は激化する一方であった。

ケナンがシカゴ大学で講義を始めたのは、四月九日のことである。彼はこの日の日記に、次のように記し、暗澹たる気持ちを吐露した。「新聞はマッカーサーとトルーマンの記事で満ちており、私は混乱の嫌な予感がする。酔っぱらいの集まりがボートに乗って言い争い、滝の縁まで漂流しているようである。じきに、戦争に行くのではないだろうか。戦争は何と荒涼としたものであるうか。<sup>(10)</sup>」

マッカーサー将軍の解任をめぐる世論の激昂、マッカーシーが牽引する反共ヒステリアを前に、戦争に至らない手段でソ連に対する対抗する政策は辛うじて維持されているようであった。

## 二一 『アメリカ外交50年』の議論

ケナンはまず第一章「スペインとの戦争」で、アメリカはかねてキューバの叛乱を憂慮していたが、スペイン公使の米大統領に対する中傷が新聞に漏洩されたこと、ハバナ号事件がアメリカの世論を「あまりにも」刺戟したことで、戦争が不可避となったと歴史的には判断されていると説明した。しかし彼の解釈では、これらの事件は「それ自体では充分な開戦の理由にはなり得なかつた。」議会はスペインに対してキューバの放棄を要求し、もし要求が認められなければ、大統領に武力行使を容認する決議を採択し、三日以内の返答を求める最後通牒をスペイン政府に突きつけた。アメリカ政府は「事態の平和的解決」を「真面目に考慮」することなく、「戦争に至らざる手段による解決の可能性が全然消滅したといひ得ないような状況の下において」、議会と国民の要求に屈したのである。開戦後すぐに、米海軍がマニラ沖でスペイン海軍を破り、マニラを占領したことで、アメリカは戦後のフィリピン島の領有を余儀なくされた。フィリピン攻撃は政府の一部の政策決定者によって決められ、マッキンレー大統領はその意義について「全く貧弱な理解しかもっていなかつた。」

戦後のフィリピン領有問題について、ケナンは領有に反対した反帝国・反膨張主義者の「警告の迫力と真摯さおよびかれらの主張のもつ、いまだ本当に論駁されていない論理の正しさに感銘を受ける」と称賛し、海外植民地の支配に反対する。「われわれの国家として最も顕著な政治的失敗は、……われわれとして市民権を全面的に許与するつもりのない他の国民ないしはグループと、わが国民の主体をなすものとの間に、義務を伴った政治的靱帯を確立しよう

とした試みの中にあつた……遠方の住民を統治するということは、われわれの口に合わないのである。」ケナンは戦争に関する政府の政策を次のように断ずる。「開戦および軍事行動の性格の決定などを左右した諸般の理由に対して、厳粛かつ慎重な考慮が十分に払われず、国家的利益について細心かつ系統的な評価が充分行われなかつた。」<sup>11)</sup>

第二章「ヒップスレー氏と門戸開放主義」でケナンは、門戸開放宣言はイギリス政府が一八九八年春、中国政策でアメリカとの共同歩調を求めたことが発端であつたと言明する。マッキンレー政権は当時キューバ問題に忙殺され、とくに反応しなかつたが、これに落胆したヘイ駐英大使が帰国して國務長官に就任し、中国問題専門家のロックヒルを顧問に任じるや、事態が動き始めた。ロックヒルの友人で、中国海関の高官で英人ヒップスレーは九竜でのイギリスの行動に苦慮し、ロックヒルに対して、中国における貿易に関する「門戸開放」を維持するために、「可能な措置をとる」ように要望した。ヘイは「その実際の意義を十分に理解」することなく、その狙いがイギリスに向けられたものかもしれないということを考えることなく、「それが遂行された場合の結果についていかなる特定の責任をも引き受ける用意をもっているようなものではなかつた。」ヘイは門戸開放通牒を二度にわたつて関係諸国に送り、了承を得たことで、「輝かしい外交的勝利が達成されたというような印象」を与えた。この政策は「高遠な理想的な響きをもっていたし、国内において聞えがよかつた。」ケナンの評価では、門戸開放原則は、「国際社会においてアメリカの原則にとり素晴らしい勝利の一撃―アメリカ的観念をうち立てるためのアメリカ的一撃―が加えられた」ものであるという「神話」が形成されたのである。<sup>12)</sup>

次の第三章「アメリカと東洋」は、第二章の議論をもとに、門戸開放原則を「擁護するため実力を使用する用意を、われわれは、いかなる場合にももたなかつた」と批判する。これに対してセオドア・ルーズヴェルト大統領が進めた

タフト・桂協定、ルート・高平協定は、日本が「満州において獲得した地位に対する暗黙の承認」を意味するのであり、これは門戸開放原則が、中国の実情に明確に適用できないことを示していた。つまりアメリカは、アジア大陸の列強である日本の立場に「いやがらせ」をおこなっていたのである。「外国政府に勧めて、崇高な道徳的・法律的原則の宣言に署名させることによって、われわれの外交政策上の目的を達成しようとする傾向は、アメリカの外交のやり方に強力かつ永続的な力を及ぼしているように思われる。」それは国内社会における「法律的観念を国際社会に移植しようとするアメリカの顕著な傾向」と関連している。

一九三五年に國務省のアジア問題専門家であるマックマレーは、日本を軍事的に敗北に追いやって、ソ連が「うまい汁」をすうだけであると警告する予言的な覚書を起草した。今日、日本は満州、朝鮮半島、中国本土から駆逐され、皮肉なことにアジアにおけるアメリカの過去の目標は「表面的にはほとんど達成された。」しかしアメリカは日本が朝鮮と満州で担っていた「問題と責任」を引き継いでいる。「われわれ自身が国際法と道徳律の観念の奴隷」になるのではなく、「これらの観念を、それが本当に真価を発揮するような機能、すなわち、国家的利益を穩かに教化するという控え目ではほとんど女性的ともいふべき機能だけに限定するならば」、アメリカは東アジアでより少ない問題に遭遇するであろう。<sup>(13)</sup>

第四章「第一次世界大戦」は、ヨーロッパでは戦火の長期化に伴い、世論は「殺戮を終熄させられる妥協的な平和についての合理的提案」に背を向けたと指摘する。「民主的政府をもつていと自任している国の大部分において、世論といわれているものがしばしば大衆の意見を全然代表せず、政治家、評論家およびあらゆる種類の宣伝家など……非常に騒がしい少数の連中の利益を代弁しているのでないか。」この種の人々は、「軽率なまた盲目的愛国心をあ

おるようなスローガンに逃げ道を求める。」民主主義は「平和を愛する」が、ひとたび戦争に入るや、「忿怒に狂って戦う。」「民主主義というのは、この部屋くらいの高さの身体と、ピンの頭ほどの頭脳をもったあの有史前の巨獣に、不愉快なことだが似ているのではないか。」アメリカは戦争に入る前は、ウィルソン大統領が言明したように、全面勝利という考えには反対していたが、いったん戦争に入るや、全面戦争をもたらすまで徹底的に戦わなければならないという強固な決意を持つに至った。ウィルソンは「世界を民主主義にとつて安全なものにする目的」をもって戦い、新しい平和の基礎は「権力の共同体」「組織化された共同の平和」、国際連盟の上に築くという原則の下、実際にはドイツに平和を強制するという「悲劇的な歴史的失敗」をおかした。そもそもアメリカは、「あたかも庭の手入れをするように」イギリスが一九世紀ヨーロッパの勢力均衡の維持に腐心したことで、平和が保たれたことを理解していなかった。アメリカはヨーロッパで重大な紛争が生じつつある時、軍備拡充をはかり、イギリスの救援と戦争の早期終結という目的のために参戦し、参戦後は道義的スローガン、聖戦論を避け、「ヨーロッパ大陸における将来の安定をできるかぎり阻害しないような戦局の終結を達成」<sup>(14)</sup>すべきであった。

第五章「第二次世界大戦」でケナンは、アメリカの参戦のきっかけとなった対日関係について、「対日戦争の回避を目的とし、他の動機によってあまり煩わされない慎重かつ現実的な政策は、われわれが実際追求したところのものと相当違った一連の行動をとらしめ、したがっておそらくすっかりと違った結果を招来したであろう」と分析し、アメリカ側の開戦責任を示唆する。ソ連の東ヨーロッパの軍事的支配と満州への進出はヤルタ会談の結果ではなく、戦争の最終段階における軍事行動の結果であった。西側諸国はこれらの地域に先に到達する以外にソ連の占領を防ぎようがなかった。第二次世界大戦中の最大の錯誤は、連合国間の諸決定にあるというよりも、軍事戦略に対してアメリカ

カ社会がとつた「態度と理解の仕方」に、より根本的な誤りがあった」のではないだろうか。とくに戦争に対して「民主国家の目的を達成するための手段として限界をもっていることを、理解していない」ということである。かりに民主主義が推進される場合には、それは「人間の心のうちに何か起つた結果として、彼の精神向上が見られ、他の人びとに対する真のつながりが強く意識された時」のみであり、戦争による破壊を「世界を改革しようとする希望、熱意や夢などを伝えるための適当な手段として」<sup>(15)</sup> 考えてはならない。

第六章「現代世界の外交」は講義のまとめである。ケナンの見解では、アメリカの問題の多くは、「行政府がわが国世論の短期的動向に縛られやすい度合いに起因しているようだし、また、外交政策問題に対する世論の反応の主観的で変わりやすいといつてよい性格に淵源している。」アメリカの過去の外交政策の立案における「最も重大な錯誤は、いわゆる国際問題に対する法律的・リーガリスティック道徳家的アプローチと呼ばれるもののうちに求められる。」これは「ある体系的な法的規則および制約を受諾することによって、国際社会における各国政府の無秩序でかつ危険な野心を抑制することが可能となるという信念である。」国際問題に対する法律的・道徳的アプローチに内在するとくに「大きな欠陥」は、「国家間の問題の中に善悪の観念をもち込むこと、国家の行動は道徳的判断の対象となるに適用していると仮定することである。」「つい先頃のことであるが、ある有名なアメリカ人は、『戦争の目的は勝利に外ならない』……と断言した。」「全面勝利という観念ほど、『危険な妄想』はなく、『過去においてこれほど大きな害毒を及ぼす恐れのあるもの』はない。

ケナンは最後に、救世主的な意識を捨て、抑制的な外交政策を実施するように呼びかけた。「もしわれわれの国内における目的と企てが穏当なものであり、他国民に対して尊大なあるいは敵意ある態度や優越的妄想によって汚され

ていないものだとしたならば、われわれの国民的利益の追求は必ずやよりよき世界の現実に導いて行くであろう。」このような考え方は野心的でも魅力的でもなく、またアメリカの自己イメージにとっても喜ばしいものではないかもしれない。あるいは「怯懦と反動の臭い」を感じることもあるかもしれない。しかし、「その発想において現実的であり、われわれ自身および他の人びととともにあるがままに観察しようとする努力に基礎をもつところのものは、……狭量であることはあり得ないのである。」<sup>(16)</sup>

ケナンはこれら六回のシカゴ大学講義に、二つの論文「ソヴェト行動の源泉」と「アメリカとロシアの将来」を加え、『アメリカ外交50年』とした。前者はもちろんケナンが封じ込めを提唱したことであまりに有名な論文であるが、この論文の大事なポイントは、米ソ関係の問題が「本質的には」アメリカの価値が試されていることであり、アメリカが「破滅を避けるためには、自分の最良の伝統を発揮し、偉大な国として存続することに値すること」を示さなければならぬと訴えたことであつた。同様に後者も、国民に対ソ政策を進める上で冷静さを求め、戦争が「なんら積極的な目的を實現し得ない」こと、アメリカがソ連の「国内発展」に及ぼすことができる「もつとも重要な影響力は、ひきつづき実例を示すこと」であると主張したのである。両論文が戦争に至らない手段でソ連の脅威に対抗する必要性を説いた点で、後述するシカゴ大学講義の問題意識と共通していた。<sup>(17)</sup>

### 三 ケナンの政治・外交評論

『アメリカ外交50年』が民主主義への懐疑、世論への低い評価、政治家に対する不信を披露したものであることは

言うまでもない。またアメリカ外交の道義的、原則的な性格を戒め、海外コミットメントに極めて慎重なことも明らかであった。

ケナンの職業政治家に対する評価は極めて低い。彼は一九三三年の米ソ国交樹立に至る政策に関わった経験から、アメリカの「政治家気質の最も本質的で抜きがたい特徴の一つ」を次のように酷評する。「この政治家気質の特徴は、その神経質なまでの自意識と、内向性にあり、彼らが声明を出し、行動を決める場合にも、表面上の対象となつてゐる国際問題に対する効果が狙いではなく、アメリカの世論、議会筋の見解に及ぼす効果の方を最初に、そして第一義的に考慮しようとしているのである。」ケナンの理解では、ルーズヴェルト (Franklin D. Roosevelt) 大統領もしばしば同じような行動をとつた。

その後の外交官ケナンの経験は政治家に対する評価を高めるものではなかつた。彼は一九四五年一二月、米英ソ三カ国外相会談出席のため訪ソしたバーンズ (James F. Byrnes) 国務長官の外交手腕を身近で観察する機会を得た。ケナンのバーンズ評は低い。「彼は行き当たりばつたりの、何らはつきりした一定の計画を持たず交渉に臨み、限定された目的も制約もなしに交渉を行つていた。彼は何よりも自分の機敏さと沈着さと先手の利をとる機略を自負していた。今度の会議で、ソビエトとの交渉に臨む彼の弱点は、彼の主目的が、何らかの形の協定さえ手にすればよいのであつて、どんな内容の協定かについては大して関心を持っていなかった点にあつた。……彼にとつては、協定が国内に及ぼす政治的効果の面でこそ必要なのである。」<sup>18)</sup>

ケナンはマッカーシー上院議員らを最悪の職業政治家と見なし、彼を生み出した民主制度に対する不信を一層募らせた。一九五一年春はマッカーシーの政治的影響が頂点に達した時期であつた。ケナンはシカゴ講義の直後、「私は



大衆メディアに対するあらゆる信頼を失ってしまった。……この国ではマッカーシズムが、聡明な外交政策の履行が不可能になったという意味で勝利を収めた。……われわれは二年以内に戦争が起きることを想定しなければならぬ」と記し、アメリカの政治制度と国民の能力に対する「消えることのない疑念」を感じたのである。外交問題に通じない政治家と大衆が適切な外交政策を練り、運営できるとは到底考えられないというのが、ケナンの見立てであった。<sup>(19)</sup>

ケナンのアメリカの政治制度、政治家、世論に向けられた深い不信の念は、一般的・普遍的な原則を掲げる外交原理にも向けられた。一四か条の原則、大西洋憲章、解放ヨーロッパに関するヤルタ宣言、トルーマン・ドクトリンは国際政治の複雑な様相を無視し、現実主義にもとづく処方箋を打ち出すことを難しくしたからである。ケナンはトルーマン宣言に関して、「ものごとの決定を普遍化あるいは一般化しようとするアメリカ人の執拗な衝動」を嘆じ、それは「不幸なこと」であると見なした。それは国際問題に対する人々の理解を「助けるどころか、むしろ混乱」させ、「政策決定の過程を妨げ、ゆがめる」のである。<sup>(20)</sup>

ケナンのこれらのアメリカ外交批判とともに、シカゴ大学講義の重要なテーマは、戦争が国際関係に与える大きな影響、弊害であった。そもそもケナンには戦争に対する道義的嫌悪感があった。第二次世界戦争中に連合軍の空爆を受けたハンブルクの破壊を見て、ケナンは一九四九年三月、次のような感慨を記した。「ここで初めて私はどんなに差し迫った戦争上の利益―仮にこのような利益がありとして―をあげるために、過去数世紀にわたり、戦争とは全く関係のない目的のために、人間の手で宮々と築き上げられてきた市民の生活と物質的価値を、このように途方もなく、無慈悲に破壊することは、絶対に許されないことだという、ゆるぎのない確信を持ったのである。……もし西方世界が、真に、道義的にはより高い出発点に立っている……という自負を本物としようというのなら、仮に戦争をしても、

軍事戦争ばかりではなく、道義上の戦争もやるべきだ。さもなければ、戦争など全くすべきではないことを悟るべきであった。なぜならば、道義的原則は西方世界の力の一部であるからだ。<sup>(21)</sup>

しかも、過去半世紀の歴史はアメリカが戦争を選んだ場合、戦前に予期もしなかったような広範な、そして複雑な国際的責務を戦後に負うことを示していた。アメリカはキューバをめぐる対立でスペインとの戦争に勝利を収めた後、遠方のアジアのフィリピンを領有した結果、対日関係で難しい課題を抱えることになった。第一次世界大戦後、アメリカの国際的責任は拡大し、第二次世界大戦後は世界的な規模で軍事的負担を負うことになった。アメリカはとくにヨーロッパと東アジアの安全保障に責任を担ったが、アメリカの政治体制に照らし、これらの地域でのコミットメントを適切に果たし続けることができるのか、ケナンは悲観的であった。彼が唱えるドイツ中立化構想、対日安全保障条約の見直し論は、アメリカの対外関与の縮小と自立的な日欧の出現の重要性と連動していたのである。

ここで興味深いのが、アメリカの対日戦前外交に対するケナンの痛烈な評価である。ケナンの見方では、ルーズヴェルト大統領の失敗は数多いが、その中で最も重大な失敗は対日外交であった。「日本との不必要な戦争を挑発した」からである。ケナンは、アメリカが東アジアではるかに重大な利益を有する日本の立場に配慮することなく、門戸開放の原則にこだわり、日本を追い詰めて、軍事的手段で日本を徹底的に破り、日本を無力化した。ところが現在アメリカが東アジアで対峙している国は、かつて日本が対決した中国でありソ連であった。過去半世紀のアメリカ外交の歴史は軍事的手段に安直に訴えてはならない教訓に満ちていた。ケナンが、アメリカは外科医ではなく庭師の感覚で、忍耐強く慎重に国際問題の対処にあたるように訴えた所以である。彼は武力衝突に至った戦前の対日政策を失敗と捉え、その経験をもとに冷戦下のソ連に対しては戦争に至らない手段での封じ込めを唱えたのである。<sup>(22)</sup>

トルーマン政権は四月までに、朝鮮戦争の休戦に向けた交渉を始める用意があった。トルーマン大統領はマッカーサーを解任した直後の全米向け演説で、朝鮮戦争を第三次世界大戦へ拡大してはならないこと、戦争を限定化しなればならないこと、アメリカ政府は「平和的な解決」を希求し「そのための扉はいつも開いていること」を強調し、朝鮮半島での「平和の回復のためにいつでも交渉する用意がある」と言明した。アチソン國務長官も一週間後の四月一八日の演説で東アジア政策について説明し、現在ダレス (John Foster Dulles) 特使のもとで対日本講和の協議を関係国と進めていること、フィリピン・オーストラリア・ニュージーランドの安全を保障する話し合いをおこなっていること、朝鮮半島では「平和的な手段で」問題の解決を望んでいることを明らかにした。<sup>(23)</sup>

しかし同時にトルーマン政権はNSC四八／五 (五月一七日) で、中国が「朝鮮外で」侵略行為を起こすようであればという条件付きながら、アメリカは「海軍・空軍力による中国沿岸の封鎖実施、……朝鮮外で共産中国によって保持されている目標に対する選択的軍事行動、……中国国民党軍の防衛的・攻勢的参加とそれを効果的にするために作戦上必要な援助の供与」の対抗措置を検討するように主張した。トルーマン大統領はまた、中国軍による大規模な新たな介入の場合、核兵器で報復する方針を排除していなかった。マッカーサー的な軍事戦略は完全に放棄されていた訳ではなかったのである。<sup>(24)</sup>

ケナンは三月以来、アチソンらに朝鮮休戦交渉を働きかけていた。彼はアチソンの依頼を受け、五月下旬にソ連国連代表マリク (Jacob Malik) に密かに会い、折衝を始めた。朝鮮休戦交渉の発端であった。<sup>(25)</sup>

## おわりに

アメリカは建国以来約一五〇年間、国際問題に対する関与・介入を回避する孤立主義を実践し、恵まれた国際環境が保障する「無料の安全保障」を享受した。仮に関与する場合には、二度の世界大戦が示すように、戦争による介入が基本であり、孤立と戦争の間に中庸はなかった。そこには、敵対的な国とは外交交渉を通じて対立の解消、懸案の解決にあたるヨーロッパ的な外交とは、異質なアメリカ外交の伝統があった。

したがって第二次世界大戦後に直面した戦争でも平和でもない冷戦はアメリカ国民には新奇な国際事象であり、果たすべき国際的責務の難しさは例を見ないことであった。ソ連の独特の脅威に対して、ケナンが提唱した封じ込めは戦争に至らない手段で対抗するという意味で画期的であったが、それが果たして国民に受け入れられるのか、あるいは長期にわたり実行されるのか、自明のことではなかった。朝鮮戦争の勃発と激化、マッカーシーが扇動する狭隘な反共主義、マッカーサー將軍の好戦的な主張は封じ込めの最後の一線を越え、ソ連との戦争をもたらす危険があった。ケナンがシカゴ大学で過去半世紀のアメリカ外交を振り返り、そのあり方に警告を発した背景には、このような内外の情勢があった。それだけに、冷戦が熱戦化した最初のケースである朝鮮戦争が限定化されたまま、戦前とほぼ同じ境界線で休戦交渉がまとまったことは、その後の冷戦の行方、そして封じ込めの展開にとって重大な意味があった。つまり米ソは直接的な軍事対決を避け、第二次世界大戦終結時の東西の境界線を改めて尊重したことで、形成途上にあった冷戦を戦うルールを確認し、将来新たな国際緊張が生じた際に全面衝突に至ることなく事態を収拾するとい

う暗黙の了解を得たからである。<sup>(26)</sup>

『アメリカ外交50年』は、一九五一年春のアメリカの内外の環境に着目することでより良く理解できると思われるが、この本が今日に至るまで長く読み継がれ、優れたアメリカ外交論として高い評価を受けているのは、読者がケナンの見解に時代を超えたアメリカ外交の特質・特性を見出しているからであろう。ケナンの研究にはまた、日本でケナンと最も親しい関係にあつた細谷千博が「歴史的経験の検討から、アメリカの対外行動のあり方を反省し、将来の政策への指針を探ろうとする」立場があつたと指摘するように、実際の政策をクリティカルに見直し、歴史の洞察に満ちた見解を提示する魅力があつた。<sup>(27)</sup>

ケナンは一九五二年にソ連大使、一九六〇年代初頭にユーゴスラヴィア大使を務めた以外は公職に就くことはなく、プリンストン高等研究所にて数多くの著作、論文を世に送り出した。彼は二度ピューリッツァー賞を受け、一九八九年にはアメリカ市民に与えられる最高位の勲章である大統領自由勲章を授与されるなど、二〇世紀アメリカを代表する知識人として活躍した。『アメリカ外交50年』はそんなケナンのデビュー作にふさわしく、流麗な筆致でアメリカ外交の特徴を鋭く摘出し、民主体制のあり方を厳しく問い直したばかりか、示唆に富む政治・外交論を展開した。ケナンの知性が遺憾なく発揮された、まさに名著であつた。

(1) George F. Kennan, *American Diplomacy: 1900-1950* (Chicago: The University of Chicago Press, 1951). 興味深いことに、モーゲンソーは一九五〇年春にウォルグリーン講演をシカゴ大学で行う、この講義をもとに翌年 *In Defense of the National Interest: A Critical Examination of American Foreign Policy* (New York: Alfred A Knopf, 1951) を刊行した。モーゲンソーは一九四〇年代後半にドイツ問題に関する国務省顧問を務めた経緯もあり、ケナンとは知り合いであつた。両者はともにリ

アリストとして知られているが、刊行時期がほぼ同じこの二つの本をめぐる知的交わりについては、今後の興味深い研究課題であろう。曖昧な冷戦概念の歴史的展開を精緻に検討したのが、滝田賢治『冷戦概念と現代国際政治史―日米における議論を基礎に』細谷千博・丸山直樹編『ポスト冷戦期の国際政治』（有信堂、一九九三年）、二二―二四頁である。

- (2) David C. Hendikson, "Review of *American Diplomacy* by George F. Kennan," *Foreign Affairs*, Vol. 76 (Sep-Oct, 1997), 222; Melvyn P. Leffer, "Remembering George Kennan: Lessons for Today?" *Special Report* 180 (December 2006), 8; George F. Kennan, *American Diplomacy: 1900-1950* の最初の邦訳版は、ジョージ・F・ケナン『アメリカ外交50年』（近藤晋一・飯田藤次訳、岩波書店、一九五二年）である。ケナンがグリーンネル大学で行った二つの講演を加えた増補版（旧版タイトルより副題の *1900-1950* がなくなり、George F. Kennan, *American Diplomacy*, Expanded Edition）の刊行（一九八四年）に伴い、有賀貞を新たな訳者として八六年にこの増補版の翻訳書（近藤晋一・飯田藤次・有賀貞訳『アメリカ外交50年』増補版、岩波書店、一九八六年）が刊行され、二〇〇〇年に文庫化された。本稿ではこの文庫版（ジョージ・F・ケナン『アメリカ外交50年』近藤晋一・飯田藤次・有賀貞訳、岩波現代文庫、二〇〇〇年）を使用する。二〇一二年の六〇周年記念版は、George F. Kennan, *American Diplomacy*, Sixtieth-Anniversary Expanded Edition, with a New Introduction by John J. Mearsheimer (Chicago: The University of Chicago Press, 2012).

- (3) 例えは、主なケナン伝記を参照。David Felix, *Kennan and the Cold War: An Unauthorized Biography* (New Brunswick, NJ: Transaction Publishers, 2015), p. 153; John Lewis Gaddis, *George F. Kennan: An American Life* (New York: The Penguin Press, 2011), pp. 420-24; Walter L. Hixson, *George F. Kennan: Cold War Iconoclast* (New York: Columbia University Press, 1989), pp. 48, 118; David Mayers, *George Kennan and the Dilemmas of US Foreign Policy* (New York: Oxford University Press, 1988), p. 189; Anders Stephanson, *Kennan and the Art of Foreign Policy* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1989), p. 191; Nicholas Thompson, *The Hawk and the Dove: Paul H. Nitze, George Kennan, and the History of the Cold War* (New York: Henry Holt and Company, 2009), pp. 132-33; ショーン・ルカーナ『評伝 ショージ・ケナン―対ソ「封じ込め」の提唱者』（菅英輝訳、法政大学出版社、二〇一一年）、一七三―一七八頁。

- (4) 初期の封じ込め政策については、佐々木卓也『封じ込めの形成と変容―ケナン、アチソン、ニッツェとトルーマン政権の冷戦戦略』（三嶺書房、一九九三年）、鈴木健人『「封じ込め」構想と米国世界戦略―ジョージ・F・ケナンの思想と行動』一

九三二年～一九五二年』(溪水社、二〇〇二年)、『永井陽之助『冷戦の起源—戦後アジアの国際環境』(全二巻、中公クラシックス、二〇一三年)、『John Lewis Gaddis, *Strategies of Containment: A Critical Appraisal of Postwar American National Security Policy* (New York: Oxford University Press, 1982), Chapters 1-4; Melvyn P. Leffler, *A Preponderance of Power: National Security, the Truman Administration, and the Cold War* (Stanford: Stanford University Press, 1992).

- (5) マッカーシズムについては、『R・H・ロービム』『マッカーシズム』(宮地健次郎訳、岩波文庫、一九八四年)、『Robert Griffith, *The Politics of Fear: Joseph R. McCarthy and the Senate* (Amherst: The University of Massachusetts Press, 1970); David M. Oshinsky, *A Conspiracy So Immense: The World of Joe McCarthy* (New York: The Free Press, 1983) が古典である。第二次世界大戦中、戦後初期のアメリカの対中国政策、国務省中国専門家の中国共産党、国民党観については、『滝田賢治』『太平洋国家アメリカへの道—その歴史的形過程』(有信堂、一九九六年)、『八四—一六二頁を参照。国務省中国専門家の迫害については、『E. J. Kahn, Jr., *The China Hands: America's Foreign Service Officers and What Befell Them* (New York: The Viking Press, 1972). マッカーランは党派を超え、マッカーシーと気脈を通じる数少ない民主党上院議員であった。異彩を放つマッカーランの政治的人生は、『Michael J. Ybarra, *Washington Goes Crazy: Senator Pat McCarran and the Great American Communist Hunt* (Hanover, NH: Steerforth Press, 2004). ケナンの回顧は、『ジョージ・F・ケナン』『ジョージ・F・ケナン回顧録—対ソ外交に生きつづ』(下、奥畑稔訳、読売新聞社、一九七三年)、『一六六—一九六頁。

- (6) James T. Patterson, *Grand Expectations: The United States, 1945-1972* (New York: Oxford University Press, 1996), pp. 222-24; James T. Patterson, *Mr. Republican: A Biography of Robert A. Taft* (Boston: Houghton Mifflin Company, 1972), pp. 468-73.
- (7) D. Clayton James, *The Years of MacArthur*, III: *Triumph and Disaster 1945-1964* (Boston: Houghton Mifflin Company, 1985), pp. 534-41; Rosemary Foot, *The Wrong War: American Policy and the Dimensions of the Korean Conflict, 1950-1953* (Ithaca: Cornell University Press), pp. 96-115; Patterson, *Mr. Republican*, pp. 477-89; Michael Hogan, *A Cross of Iron: Harry S. Truman and the Origins of the National Security State, 1945-1954* (New York: Oxford University, 1998), pp. 325-29. さらにタフトの政治・外交信条については、西川賢『分極化するアメリカとその起源—共和党中道路線の盛衰』(千倉書房、二〇一五年)、『二九—三七頁。最近ケネディ元大使の優れた伝記が刊行された。David Nasaw, *The Patriarch: The Remarkable Life and Turbulent Times of Joseph P. Kennedy* (New York: The Penguin Press, 2012). 関係部分は

pp. 632-51.

- (8) 佐々木『冷戦の形成と変容』、二五四―五五頁。Foot, *The Wrong War*, pp. 123-30. Linda McFarland, *Cold War Strategist: Stuart Symington and the Search for National Security* (Westport, Conn.: Praeger, 2001), pp. 44-46.
- (9) 増田弘『マッカーサー・フィリピン統治から日本占領へ』(中公新書、二〇〇九年)、『四二九―三四頁。W・ストゥータ』朝鮮戦争―民族の受難と国際政治』(豊島哲訳、明石書店、一九九九年)、『二二―一六頁。Paterson, *Mr. Republican*, p. 487; James, *Triumph and Disaster*, pp. 611-22; Richard H. Rovere and Arthur Schlesinger, Jr., *General MacArthur and President Truman: The Struggle for Control of American Foreign Policy*, with a New Introduction by Arthur Schlesinger, Jr. (New Brunswick, NJ: Transaction Publishers, 1992) (Originally published by Farrar, Straus, and Giroux in 1951), pp. 5, 270-77; Robert A. Caro, *The Years of Lyndon Johnson*, III: *Master of the Senate* (New York: Vintage Books, 2003), p. 370; Gilbert C. Fite, *Richard B. Russell, Jr., Senator from Georgia* (Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 1991), pp. 255-64; George H. Gallup, *The Gallup Poll: Public Opinion 1935-1971*, Vol. 2 (1949-1958) (New York: Random House, 1972), pp. 970, 977, 988, 995, 1007.
- (10) Lawrence J. Haas, *Harry and Arthur: Truman, Vandenberg, and the Partnership That Changed the Free World* (Lincoln, Neb.: Potomac Books, 2016), pp. 276-77; Kennan diary entry, April 9, 1951, in Frank Costigliola, ed., *The Kennan Diaries: George F. Kennan* (New York: W.W. Norton, 2014), p. 283. サマンサ・マンローの初の伝記が外交史研究の泰斗であるケナンに刊行された。Lawrence Kaplan, *The Conversion of Senator Arthur H. Vandenberg: From Isolation to International Engagement* (Lexington, Ky.: University Press of Kentucky, 2015).
- (11) ケナン『アメリカ外交50年』、三一―二八頁。
- (12) 前掲書、三六―五四頁。
- (13) 前掲書、五八―七九頁。
- (14) 前掲書、九一―一〇八頁。
- (15) 前掲書、一二四―三七頁。
- (16) 前掲書、一四一―五六頁。



- (17) 前掲書、一五九―九〇、一九二―二三〇頁。ケナン『回顧録』下、九二―九四頁。「アメリカとロシアの将来」について、ケナンは草稿の段階で、フォーリン・アフェアーズ編集長に、「アメリカが戦争に訴えることなく、ソ連の政治的状況の内の発展に与えるために何ができるのか」議論をした」と述べている。Kennan to Hamilton Fish Armstrong, February 20, 1951, Box 33, George F. Kennan Papers, Princeton University Seeley Mudd Manuscript Library.
- (18) ショーシ・F・ケナン『ショージ・F・ケナン回顧録―対ソ外交に生きる』(上、清水俊雄訳、読売新聞社、一九七三年)、五七―二七四―七五頁。David Robertson, *Shy and Able: A Political Biography of James F. Byrnes* (New York: W.W. Norton and Company, 1994), pp. 450–52.
- (19) ケナン『回顧録』下、一九六頁。Kennan diary entry, April 17, 1951, in Costigliola, *The Kennan Diaries*, pp. 284–85.
- (20) ケナン『回顧録』上、三〇五―六頁。
- (21) 前掲書、四〇九頁。
- (22) Kennan diary entry, July 30, 1982, in Costigliola, *The Kennan Diaries*, p. 542. アメリカの戦前の対日政策と戦後の封じ込めの関係については、三谷太一郎『学問は現実にはいかに関わるか』(東京大学出版会、二〇一三年)、三七―三九頁の優れた説明を参照。
- (23) Foot, *The Wrong War*, p. 134; Truman speech, April 11, 1951, in Rovere and Schlesinger, *General MacArthur and President Truman*, pp. 264–69; Acheson speech, April 18, 1951, *U.S. Department of State Bulletin*, XXIV (April 30, 1951), 683–87.
- (24) Gaddis, *Strategies of Containment*, pp. 120–21. ブルースカミングス『北朝鮮とアメリカ 確執の半世紀』(杉田米行監訳、古谷和仁・豊田英子訳、明石書店、二〇〇四年)、五三―五九頁。
- (25) ケナン『回顧録』下、三七―三九頁。
- (26) ジョン・L・ギャティス『ロンゲ・ピース―冷戦史の証言』核・緊張・平和』(五味俊樹・坪内淳・阪田恭代・太田宏・宮坂直史訳、芦書房、二〇〇二年)、四〇五―一四頁。
- (27) 細谷千博『アメリカ外交の座標』(中公叢書、一九七九年)、一七五頁。

(立教大学法学部教授)